

ことわざの華, 〈飾りことわざ〉考  
-その新たな創出へ-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2017-12-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 時田, 昌瑞 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/19121">http://hdl.handle.net/10291/19121</a>

# ことわざの華、〈飾りことわざ〉考

— その新たな創出へ —

時 田 昌 瑞

## I はじめに

具体的なことわざとの関わりは1978年ころだったので足掛け40年になる。その間の歩みをざっと振り返ってみれば、8年後には小さな研究会の設立に関わり、研究活動や出版活動にも携わるようになった。やがて研究会は学会へと進展して行った。1997年ころに山口政信教授が入会され、その後、山口教授が開設された明治大学ことわざ学研究所に客員研究員として参加し、2016年の同研究所の閉所まで在籍した。

自分自身の研究は、埋もれている古い文献資料の博搜・掘り起しを主に、関連論考の網羅的調査などにも携わった。調査を始めた早い段階でいろはカルタ、絵画・彫刻・染織物・焼物・金工物など種々の物品にことわざをモチーフにした作品が存在することが分かり、そうした様々な資料の調査・収集も並行して行うようになった。全国各地の神社・仏閣巡りを主に、街角ウォッチングやら骨董市に出かけて物色するのも広い意味での研究活動となり、研究の方向づけとなった。

資料文献探し以外に取り組んできたものもあり、その一つが各種文献で使われていることわざを拾い出す用例収集がある。端緒は先人が行った江戸時代の俳人であり浮世草子作家の井原西鶴作品の使用例集の成果に疑問を感じたことによる。調査を自らやり直してみた結果、大幅に補足する必要がある

ことが判明し、これが用例探しの切っ掛けとなった。それ以降、対象を広げ、古代から現代に至る迄の用例収集を行うようになり、全部で10万語句（総使用語句）くらいの用例を収集するに至っている。

また、ことわざへの関心がより深まったのは、質の高い何冊かのことわざ関連の書物による導きであった。その代表的なものが古代の日本文学の研究者である金子武雄による『日本のことわざ』（初版は大修館書店から1958年、その後、別の出版社から文庫化されたものなどで3度刊行される）だった。特に興味をそそられたのが、誇張・突飛な着想・響きのよい語などが織りなして駆使される遊びの要素の高いことわざに対してであった。言い換えると、筆者にとってことわざは面白く魅力ある語句でまわられた遊び心に満ちた言い回しの傑作集であったとも言えた。こんな私的な思いがことわざ研究へのめり込むバネになったと思っている。

主要な研究活動である永年にわたる用例収集からは種々雑多で多数の言い回しを拾い出すことができただけでなく、既存のことわざ辞典にも載っていない未知のことわざにも少なからず出会い、ことわざの深遠さを知った。しかしながら、そこには同時に繰り返し用いられ決まり文句化したことわざが何百とある反面、反対に遊びの要素を持つことわざに出あうことが極めて稀だという実態にも直面するものでもあった。次章では、現代の事例からこうした問題について考えてみたい。

## II 日本のことわざの現状

### II-1 メディア調査での概要

現代の日本でどんなことわざがどの様に、どのくらい使われているのかを調べるために、全国紙の新聞とテレビ番組を主に、そこに見聞きできることわざを収集し分析したことがある。開始したのは1992年10月1日で、作業自体は規模を大幅に縮小して2017年の今日まで続けている。足かけ25年に

わたる作業の全体を明示するのはスペースの面でも無理であり, そもそも本稿の趣旨に叶うものではないので本稿の主題に関わる内容に限定して稿を進めることにする。

語句の採集に際しては, 当時発行されていた主要なことわざ辞典の項目に準拠した。一つ目は『新編故事ことわざ辞典』(鈴木棠三 創拓社 1992年 約 25,000 語句収載)。二つ目が『故事・俗信ことわざ大辞典』(尚学図書編 小学館 1982年 約 43,000 語句収載)で, その他, 数点のことわざ辞典を参照した。対象となる語句は, ことわざを軸にして, 強い関連性を有する故事・慣用句・四字熟語・ことば遊びや洒落としたが, 「カラスが鳴くと人が死ぬ」のようないわゆる俗信は対象から外した。なお, ことわざと見なす根拠は, 通常のことわざ辞典に倣ったが, 辞典への記載のない語句は辞典に準じて取り上げた。

調査内容は多岐にわたり膨大で集計仕切れていないものも多いため, ここでは開始してから1年半分のものに限って概要を記すことにする。新聞は朝日・毎日・日経・スポーツニッポンを主とした。参考程度に読売・産経・東京, スポーツ紙4種, 夕刊紙・タウン誌2種。雑誌は週刊誌2誌・子供雑誌2誌, 月刊誌は数誌を2・3か月分のみを対象にした。テレビは東京で視聴できる地上波放送に限った。厳密には対象物の件数も明示しなければならないが, 煩雑に過ぎる上, 趣旨に叶うものではないことから割愛する。

収集できたことわざは項目にして約2,000, 使用総数約9,500。使用回数では20回台の頻度のものが51項目, 30回台が27項目, 40回台が6項目, 50回台が5項目, 60回以上が7項目であった。おおよそ20分の1の語句が大変よく使われていると見て取れようか。また, 5回から19回までの項目は約500。合わせてざっと600項目の語句が常用されているものとみられる。以下に頻出度の高いもののベスト30を掲げるが, 個々のことわざの後ろの数字は頻度数を表す。①一石二鳥116 ②三度目の正直114 ③寝耳に水102 ④背水の陣79 ⑤疑心暗鬼72 ⑥目白押し71 ⑦二の舞64 ⑧しのぎを削

る 55 ⑨画に描いた餅 53 ⑩棚から牡丹餅 51 ⑩背に腹は代えられぬ 51  
 ⑩目から鱗が落ちる 51 ⑬歯に衣させぬ 50 ⑭二足のわらじ 49 ⑮両刃の  
 剣 47 ⑯太鼓判を押す 46 ⑰二の足を踏む 43 ⑱一寸先は闇 42 ⑲薄水を  
 踏む 42 ⑳氷山の一角 39 ㉑火に油を注ぐ 39 ㉒後の祭り 38 ㉓縁の下の  
 力持ち 37 ㉔一筋縄ではいかぬ 37 ㉕一朝一夕 36 ㉖雨後の筍 36 ㉗十人  
 十色 36 ㉘対岸の火事 36 ㉙宝の持ち腐れ 36 ㉚喉から手が出る 36 との  
 順番となった。

この 30 のことわざは一般の社会人であれば、自らは使わないものであっても、見聞きはしているものがほとんどであろう。そして、知悉度は下がり、認知もいくぶん低くなるものだろうが、頻度が 5 回以上の語句であれば、現代の日本人にとって馴染みのある常用語句と認定しても差支えないと推測している。

## II-2 戦後のマスメディアに見えることわざの特徴

マスメディアから収集してリスト化した 2015 年 12 月 31 日までのものにある語句は、項目数では約 3,000 程度と推測している。この全体の内容を要言化することは本稿の趣旨や紙幅の面からも難しいが、顕著な特長だけをいくつか挙げることはできる。一つは国際間の交流が盛んになるに伴ってそれまで知られていなかった外国のことわざが多々紹介されたり、外国生まれの語句が、いつの間にか定着したりするようになっていること。二つには、既存のことわざ辞典に載っていない新しい言い回しの語句が少なからず見受けられるという点がある。

少し具体的にいえば、外国から来たものとしては「勝ち馬に乗る」という語句が出てくる。アメリカで使われていたものが 1990 年代に新聞で紹介され、今や政治の世界や国政議員の選挙戦には欠かせないような存在になっているものなのだ。「一匹オオカミ」も外来のもので、戦後間もなくから使われハードボイルドの小説や東映映画の題にも活用された。かつてはニヒルな

孤立感を漂わせる人物を形容するニュアンスであったが、現在は国際テロリストを指す用語に特定されてしまった感がある。二つ目の日本生まれの語句では評論家・大宅壮一が用いた「釣った魚に餌はいらぬ」や、テレビ番組のタイトルにもなったことのある「人の不幸は蜜の味」とか、テレビでの防虫剤の広告で用いられた「亭主元気で留守がいい」、同じくテレビを通して広まった「鶏は三步あるけば忘れる」といった新たに生まれた語句が使われ定着している。蛇足だが、筆者が著した『岩波ことわざ辞典』（岩波書店2000年）はツービートによるギャグで流行語となった「赤信号皆で渡れば怖くない」を新しく生まれたことわざとして初めて辞典に収録した。

### Ⅲ 常用ことわざにまつわる問題

#### Ⅲ-1 常用ことわざ群からこぼれ落ちるもの

先に触れた1年半分のメディアでの調査を前提に、2015年までの収集分を加えたものの中で、そこに見聞できる5回以上使われる常用のことわざと見なしてよいと思われる語句は700程度かと推定している。稿を進めるにあたって、この700を現代の常用ことわざ群と仮定しておく。この常用ことわざ群を分析してみて意外なことが判明した。最も注目したのはことわざの美質を具えた優れた言い回しのものが伝えられていないという点だった。優れた言い回しとは、ことわざらしさの要素である気が利いて絶妙な譬えをもち耳響きのよさを併せそなえた語句とってよいかと思っている。

ところで、世間は広いから色々な人がいる。ことわざに対しても同じで、好きでよく使う人もいれば嫌いで使わない人もいる。嫌いな人が理由にあげるのが、説教じみて教訓臭いこと、そして手垢にまみれた常套文句だから嫌だという見解だ。教訓臭さに対してはたぶん誤解があると見ているが、ことわざイコール常套文句とする図式は疑問であり、短絡だと見ている。但し、常用ことわざが常套文句だということであれば一理あろう。とはいえ、現実に

は多くの人にとって個々のことわざに具体的に接する機会はマスメディアや友人・知人、並びに地域や仕事の関係者などに限られてしまう。マスメディア以外のものは個人差が大きくなかなか一般化し難いのでマスメディアのものに限らざるを得ないが、そこで接することわざは常用されるものが主になり、それが一般人のことわざのイメージを形成していると推定される。

ことわざに限らずどんなに素敵な言い回しであっても、過度に用いられたりすれば、言葉としての新味やインパクトを失い、飽きられたり、逆に反発を招きかねない。ことわざ嫌いな人にとっては、常用のことわざがそうした役回りになっているのかも知れない。

日本には5万以上の膨大なことわざが存在するが、大部分は大きな辞典でしか見られないので一般人の関心の対象にはなり難い。また、殆どが意味を調べる辞典のため、自分が使いこなすには活用し難い面がある。さらには、常用の語句以外の大多数のことわざは、現在のマスメディアでの使用実態から見る限り、大部な辞典で目にする以外の機会が少ないので、多様性に乏しい常用の決まりきったことわざだけが一般に周知されていると推測されるのだ。もちろん、常用のことわざは多数の人々が支持するメジャーなことわざでもあり、必ずしもマンネリ化の観点でのみ否定的に評価されるものではない。しっかり認識しておきたいのは、一般人が優れたことわざらしいことわざと出会うチャンスが乏しくなっているという現実なのだ。

### Ⅲ-2 常用ことわざと遊びのことわざ

民俗学のなかには、ことわざを機能の面から分類して、1) 批判（攻撃・非難・揶揄・悪口など） 2) 教育（知識・誠め・批評・慰安など） 3) 娯楽（比喩・形容・しゃれ・ことば遊び等）に分ける見方がある。分類の仕方や命名についての当否については議論のあるところだが、娯楽的要素をもつことわざの存在を認定しているのは評価できる。もちろん、個々のことわざの好き嫌いや評価は人によっても異なろうし、色々であっても何ら問題もない。

この意味合いでいえば、筆者は3)に相当する語句がことわざらしい美質をもつことわざ群とみている。ただ、実際には、こうした分類を以って編纂された辞典はほとんど見当たらず、一部の民俗学の分野に議論が限定されている。また、そこに収載されていることわざも、他のジャンルと比べると少ないばかりか、必ずしも必要条件を満たしていないものも混在しているようで、遊びのことわざとしての存在を示せてはいない。

この民俗学の観点から20年余に収集したマスメディアの常用ことわざを分析してみると、3)に該当するものが、1)や2)と比べて極めて少ないことが指摘できる。具体例を挙げれば、「桃栗三年柿八年」こそ20回を超す常用の中に入っているが、美人を形容する「立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花」や三段ナゾにもなっている「親の意見と茄子の花は千に一つの無駄がない」は共に8回。奇想天外な着想の「鴨がネギ背負ってくる」は7回、人名化された「平気の平左衛門」の6回あたりが目立つ程度で、あとは稀にしか顔を見せていないかゼロだ。もっとも、目立つ語句だといっても、20年余に収集した約3万程度の語句に混じるものであるから、読者や視聴者が実際に出合えるのは至難だ。言い換えれば、マスメディアからは3)に相当する語句を見出すのは限りなく困難だという結論に至るのだ。

このような状況を打破する試みとして、一つには、これまでの膨大なことわざ群から歴史に埋もれた良質なことわざを掘り起し、それに日の目を当てること。二つにはことわざとの近隣の関連領域から、ことわざ的なエキスを持つものを抽出し、それを元にして新たな枠組みに仕立て、後世に伝え広めて行く方向ではないかと考えている。その枠組みのキーの概念になるのが〈飾りことわざ〉というものではないかと考えている。

#### IV 飾りことわざとは

2014年、『辞書から消えたことわざ』（角川SSC新書）という新書版を出

した。ことわざとしては、現代は稀にしか見聞きしないし、小型の辞典では収録されていないものも多い、忘れられようとしている素晴らしい語句、約200を紹介したものだ。編集にあたっては、万を超すことわざの中から、選定の基準としたものが、ことわざの生命線と考える文句の耳響きの良さを表しているものを第一にして、「花の下より鼻の下」「良く結えば悪くいわれる後家の髪」「情けの酒より酒屋の酒」「仏ほっとけ神かまうな」「うどん蕎麦そばよりかかの傍そば」などの口調のよい語句を選定した。第二には、絶妙な譬えとなっているものを対象にした。具体的には「這っても黒豆」「ナメクジが足駄を履いて富士の山へ登る」「ムカデが草鞋履く」などの奇抜な言い回しの語句のものだ。要するに、振ったり捻ったりした言い回しに種々の技巧がこらされている上、耳響きよく、面白みのある語句を持つものといえる。こうした語句の類に共通するのは、色々な飾りの要素をもつ表現をまとった言い回しのもので、飾りのことわざと呼べるものではないかと考えている。

〈飾りことわざ〉とは筆者の造語であり、民俗学でいう娯楽のことわざとか、遊びのことわざと重なるところを持つものになる。あえて新しい造語に仕立てたのは、娯楽や遊びのことわざが意味や内容に重きを置くのに対して言い回しの表現の面を重視したことによる違いがあるからだ。補足になるが、そもそも〈飾り〉なる用語は美術史家の辻惟雄氏が日本美術の特色を言い表わす概念として使ったものだ。語呂合わせや突飛な言い回し等を具える日本のことわざの美質を表現するかっこうの概念として、ことわざに当てはめられるのではないかと考えたことよっている。

## V 飾りことわざの種類と表現法のサンプル

ここから具体的な飾りことわざの主なものを既存のことわざ辞典や収集した用例から取り出し、それを内容から分類したうえで一つのサンプルとして掲示する。分類化して例示的にサンプルとするのは、対象となる語句の全体

的な把握ができてない現状によっている。それに加え、このジャンルに属すると見られるものが少なく見ても500や600語句もあることから、全部は明示できない点も併せて考えると、この方法が適切と思われたからだ。但し、この作業は前例を知らないため、従来までのことわざの技法分類を下敷きにして独自に試みた試案分類だということを先に断っておく。また、一つ一つのことわざには複数の技法が施されたものも多くあることから、複数の分類にまたがるものを含んでいる点も付言しておく。

まず、種類としては大別して2種類となり、Aとして譬の類があり、そこには修辞・形容・準え（見立て）等のものが当てはまる。次にBとして言葉遊びの類があり、むだ口（ませ返し）・洒落ことば・三段なぞ・地口等のものが該当すると見なした。

次に、表現法としては以下のように分類してみた。なお、周知ではない語句にはかっこの中に略解を付けた。そして、周知の度合いを示す基準となるものとして中型辞典を代表して『新明解故事ことわざ辞典』（三省堂 2001年 7,300項目）の項目を指標とした。その際、各ことわざの頭に○印などをつけたが、三省堂に収載されているものには◎印、同辞典の言い回しに酷似したものには△印を付けた。○は収載されていないものの印とした。

**誇張法**：ことさらに大げさな表現を用いて強調する技法 ◎悪事千里を走る ◎蟻の思いも天に昇る ◎女の髪の毛には大象も繋がる ◎惚れて通えば千里も一里 ◎座して食らえば山も空し ◎百人殺さねば良医になれぬ ◎小姑は鬼千匹に向かう（嫁にとっての小姑の存在が苛烈） ○牛の小便十八町（長々つづくこと） ○松は千年竹は万年 ○火事が凍って石が豆腐になる ○兄嫁の水に溺れても手を取らず（男女間の倫理） ○雄猫一匹膝に乗せぬ（徹底した貞操の観念） ○風の皮を槍で千枚にはぐ ○空飛ぶ雁を吸い物に当てる ○星を竿竹でかく ○鉄砲玉に帆を掛ける（速さを強調） ○ナメクジが足駄を履いて富士の山へ登る ○天の川をか

き流すよう (弁舌さわやかで雄弁) ○運がよけりゃ牛の糞も味噌になる  
○貰うものなら元日にお弔い (強欲極まる) ○昨日の娘は今日の婆 (月  
日の過ぎ去る速さ)

**諷喩法** : 絶妙なたとえを駆使する技法 ◎へそが茶を沸かす ◎鴨がネギ  
背負ってくる ◎転べば糞の上 (災難が続く意) ◎娘の子は強盗八人  
(娘の育成には多大な費用がいる) ◎下駄も阿弥陀も同じ木の切れ ◎百  
日の説法屁一つ ◎気のきいた化け物足を洗って引込む時分 (退出・退  
位を促す) ◎耳取って鼻かむ (突拍子もないことをする) △他人の女房  
と枯れ木の枝は上るほど危ない ○牛の糞にも段々 (何ごとにも順序があ  
る意) ○鼻毛でヤンマ釣る (長い鼻毛) ○ドジョウの尾に蛇が食いつく  
(やたら細長いこと) ○カラスの白糞 (元とは似ない) ○人の心と西瓜  
は皮一枚 (量り難いこと) ○蚊の脛にヤスリをかける ○唐辛子をワサ  
ビで和えたよう (強引にやる意) ○鰻を割るに鯨の刀を用いる ○蟻の  
ヒゲで大仏を曳く ○ホウズキと娘は色づくとも虫がつく ○道楽息子に金  
の番 ○トコロテンの幽霊をコンニャクの馬に乗せる (グニャグニャなこ  
と)

**同音・類音反復法** : 同音や類音を繰り返すことによって耳響きがよく印象  
を高める。同音や類音のものには下線をつけた。

◎見ざる聞かざる言わざる ◎驚き桃の木山椒の木 ◎花の下より鼻の  
下 (風流より実質) ◎日光見ずして結構というな ◎案じる (餡汁) より  
団子汁 (心配するより美味しい物を食べの意) ◎医者智者福者 ◎早飯  
早糞早算用 ◎理詰めより重詰め ○商いは飽きない (商売は辛抱強く)  
○あんま (按摩) にサンマ (秋刀魚) ○いしがき (石垣) にくしがき  
(串柿) (言葉は似るも中身は異なる) ○日がさ雨がさ月がさ日がさ ○  
ニラ, ニンニク, 握り屁 ○信州信濃の新そばよりも私ゃお前のそばがい  
い ○医者が手を放すと石屋がとる (死んでも金がかかること) ○いしゃ  
(医者) のいの字はいのち (命) のいの字 (人命に関わる大切な仕事) ○

苦勞屈託<sup>くつたく</sup>身の葉 ○親ばちちゃんりん蕎麦屋の風鈴 ○しょうが（生姜）無ければみょうが（茗荷）がある ○憚りながら葉ばかりだ（実質の無いこと） ○みかん（蜜柑）きんかん（金柑）さけ（酒）のかん（爛）親は折かん子はきかん（聞かん） ○医者と石屋は漢字でお書き、唐紙<sup>とうし</sup>唐紙<sup>からかう</sup>仮名で書け（紛らわしいものの識別をいう） ○瓜売りで売り損なう ○悪かったも勝ったのうち ○よかんべいよりあかんべい

**洒落・無駄口法**：◎その手は桑名の焼き蛤 ◎有る時は蟻があり、無い時は梨もない（金の有り無しを言う） △竹屋の火事でぼんぼん（言いたい放題） ○蟻<sup>とう</sup>が十なら芋虫<sup>はたち</sup>二十（ありがとうの意） ○見上げたもんだよ屋根屋のフンドシ（見上げたものだの意） ○かたじけ茄子の奈良漬（かたじけないの意） ○猿の小便木にかかる（気に掛かるの意） ○だんだん良く鳴る法華の太鼓（だんだん良くなる） ○犬と猫の喧嘩でにやわん（似合わない意を鳴き声に掛ける） ○あかん弁慶その手は義経（駄目だよ、その手はよしの意） ○医者に股引はこんがよい（「来ん」と「紺」を掛ける） ○焼けた稻荷でとりえが無い（鳥居と取り柄を掛ける） ○幽霊の手討ちで死骸がない（し甲斐がないこと） ○清正の雪隠で楯はなし（やりっぱなしの意） ○やもめの行水でゆとりがない（①勝手にゆうとれ②ゆとりもないの意） ○分かった分かった牛の爪、分からぬ分からぬ馬の爪（牛の爪は分れ、馬は分れていないことから） ○傘屋の小僧で骨折って叱られる（苦勞して逆に叱られる意）

**謎かけ法**：何々と掛けて、何々と解く、そのココロは？ という三段なぞの構造をもつもの ◎親の意見と（掛けて）冷酒（と解く）は（ココロは）後になって利く ◎牛の小便と親の意見は長くとも効かぬ ◎意見と餅は搗くほど練れる ◎親の意見と茄子の花は千に一つの無駄がない ◎嘘と坊主の頭はゆったことがない ◎金持ちと灰吹きは溜まる程汚い ○冗談とフンドシはまたにしる ○凧と質屋は上げ下げでなければ食われぬ ○桶屋と西瓜は叩かねば食われぬ ○夏座敷とカレイは縁側がいい ○猟師

と芝居者は当たりにゃ銭にならねへ ○ゲジゲジと辻風は遭わぬが得 ○  
雪と欲は積るほど道を忘れる

**ことば遊び法** : ◎雨の降る日は天気が悪い ◎犬が西向きゃ尾は東 ◎北  
に近けりゃ南に遠い ◎オタマジャクシがカエルになる ◎蛸に骨無しク  
ラゲに目無し ○ニワトリは皆はだし ○親父は俺より年が上 ○親父は  
男でおっかあ女 ○兄は弟より年ゃ上だ ○兄貴はわしより年が上 ○雉  
の雌鳥ゃ女鳥 ○トウガラシは辛く砂糖は甘い ○目は二つ鼻は一つ ○  
火<sup>かへん</sup>辺は乾き水<sup>すいへん</sup>辺は潤う

**擬人化法** : ◎目くそ鼻くそを笑う ◎石のもの言う世の中 ◎ドングリの  
背比べ ◎清濁併せのむ(度量が大きいこと) ◎石に<sup>かみしも</sup>袴を着せる ◎  
大海は塵を選ばず(度量の大きい人) ◎渋柿の長持ち(悪人の長生きの  
譬え) ◎渋柿が熟柿に成り上がる ○牡蠣<sup>かき</sup>が漢<sup>はな</sup>垂れを笑う ○青柿が熟  
柿吊う ○腐れ柿が熟柿を笑う ○コウモリが燕を笑う ○鍋が釜を黒い  
という ○あかぎれ大将にひび大将 ○提<sup>ちようちん</sup>灯が釣鐘に嫁入り ○徳利に  
口あり鍋に耳あり ○鉄砲玉の使い ○大象<sup>だいぞう</sup>兎徑<sup>とけい</sup>に遊ばず(大人物はつま  
らぬ事はしない) ○金平糖の綱渡り(危なかしいこと) ○ジャガイモに  
目鼻をつける

**人名化法** : ◎知らぬ顔の半兵衛 ◎石部<sup>きんきちかなかぶと</sup>金吉金兜 ◎木七竹八<sup>きしちたけはちへいじゅうろう</sup>塀十郎  
(木や竹の植え時や塀の塗り時) ○合点承知之助(承知したの意) ○平  
氣<sup>へいざえもん</sup>の平左衛門 ○骨皮筋右衛門<sup>ほねかわすじえもん</sup>(痩せこけた人) ○小言幸兵衛<sup>こごころべい</sup>(口やか  
ましい) ○やけのやん八 ○二八月荒れ右衛門(二月と八月は荒天の日  
が多い意) ○氣前与三郎, 出すこと止八(口先だけ氣前のいい) ○自惚<sup>うねぼれ</sup>  
自慢<sup>じまんのすけ</sup>之助(自惚れの強い人) ○お互い長左衛門<sup>ちようぜえむ</sup>(お互いさま) ○お天気  
の太郎作(よく晴れた日) ○寒四郎, 土用三郎(天氣の寒暖をいう) ○  
欲<sup>ふかえもん</sup>の皮の深右衛門 ○念仏汁吸又左衛門<sup>ねんぶつしるすいまたざえもん</sup>(念仏を唱えるより接待の汁もの  
を食う) ○丹波太郎, 信濃次郎, 近江三郎(夏の夕立雲) ○意氣<sup>いぎ</sup>の意氣  
助<sup>すけ</sup>しゃしゃらの洒落蔵<sup>し・れぞう</sup>(意氣者と洒落者) ○夢中作左衛門<sup>むちゆうさくざえもん</sup>(物事に夢中

なこと)

以上に提示したことわざは150項目ある。そのうち3割2分強が『新明解故事ことわざ辞典』に収録されているが、残りの7割近くは一般的な中型辞典にも見られない馴染みの薄い語句だとみられる。もちろん、サンプルの取り方によって多少の違いは出てくるかも知れないが、大きな誤差はないと思われる。ちなみに、中型辞典は5,000～8,000程度の収録であり、現代のメディアで見られるものは3,000程度となる。別の見方をすれば、このサンプルは辞典などにも見られない新味のある語句が多いということになる。

## むすび

筆者は、ことわざは十分に学問的な研究対象となるものと認識し、研究の一層の進展を望むものではあるが、それ以上に実際に使われてこそ価値を持ち、受け身的に享受するより積極的に使いこなすのがことわざの本筋だと考えている。メジャーなことわざが決まりきって常套文句化したとしても、それとは別にマイナーながら個性的な飾りことわざという存在があることに注目して行きたい。これがことわざの新たなジャンルとして確立して行けばことわざの世界は活性化できるし豊饒化すると期待するからだ。新しい洒落た飾りことわざがどんどん生み出され、広まることを切望している。そして何よりも、多くの人がことわざの豊かな表現力や描写力の素晴らしさを味わい、ことわざの楽しさを堪能して貰いたい。あろうことなら飾りことわざが、常用のことわざに飽き足らなさを感ずる人や、ことわざ自体を忌避する人への触発剤とならんことを願っている。

## 参考文献

- 鈴木棠三『新編故事ことわざ辞典』創拓社 1992年  
尚学図書『故事俗信ことわざ大辞典』小学館 1982年

- 時田昌瑞『岩波ことわざ辞典』岩波書店 2000年  
三省堂編修所『新明解故事ことわざ辞典』三省堂 2001年  
北村孝一『故事俗信ことわざ大辞典 第二版』小学館 2012年  
前田 勇『浪花しゃれことば』むさし書房 1955年  
柳田國男『なぜとことわざ』講談社学術文庫 1976年  
別宮貞徳『日本語のリズム』講談社現代新書 1977年  
鈴木棠三『日本語のしゃれ』講談社学術文庫 1979年  
鈴木棠三『新版ことば遊び辞典』東京堂出版 1981年  
小野恭靖『ことば遊びの文学史』新典社 1999年  
相羽秋夫『しゃれことば事典』東方出版 2014年  
時田昌瑞『辞書から消えたことわざ』角川 SSC 新書 2014年

(ときた・まさみず 元明治大学ことわざ学研究所)